

國學院大學学術情報リポジトリ

荒神：障礙神から竈神へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 迪子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001572

荒神 —障礙神から竈神へ—

Kojin: From The Diety of Destruction to the Deity of a Cooking Stove

黒田 迪子

キーワード：宇賀神 荒神 三宝荒神 土公神 竈神

关键词：宇賀神 荒神 三宝荒神 土公神 竈神(灶神)

要旨

これまで、荒神についての民俗学の研究では文献史料を活用する例が少なかった。本稿では荒神についてその文献史料の整理を試みるとともに、民俗伝承の実態についても概観してみる。

文献から辿ることができた点としては、たとえば、荒神と三宝荒神とが祭られているのが民俗の実態であるが、早い例は平安時代11世紀の『水左記』の荒神祓のかたちであった。その次が鎌倉期12世紀の『真俗雜記問答鈔』の荒神供というかたちであった。13世紀から14世紀の中世の多様な神仏信仰が混沌としていた状態のもとでは、天台密教の十禪師や宇賀神に対比されるかたちの荒神の信仰も生まれていた。それに陰陽五行の信仰も混淆して、土公神との習合、竈神としての荒神や三宝荒神のかたちが展開してきた。その三宝荒神の由来については、『神道雑々集』が早い例であるが、その由来からいえば、「十八契印儀軌」『簠簋内伝』の「三神」、『仏説大荒神施与福德円満陀羅尼經』の「三鬼」、「竈神祭文」の「三マヤキャウ(三昧耶形)」からきている可能性がある。

摘要

迄今为止，在针对荒神的民俗学研究中，实际运用历史文献进行分析的实例少之又少。本文将试着在整理荒神的相关的文献史料的同时，也将探究民俗传承的实际形态。

从文献资料里得到的点，祭祀荒神和三宝神是一种民间传承。早在平安时代11世纪的《水左记》里就有“荒神祓”的有关记载。之后的镰仓时代12世纪的《真俗杂记问答鈔》中也有“荒神供”的相关记载。13世纪到14世纪的中期，在多种多样，神佛信仰混杂的状态里，将天台密教里的十禅师和宇贺神进行对照的荒神信仰又衍生开来。而且与阴阳五行信仰混杂，并且配合土公神，作为竈神出现的荒神和三宝荒神的扩展开来。这种三宝荒神的由来，在《神道杂々集》里是最早的例子。要说其由来的话，“十八契印仪轨”里的《簠簋内传》中的“三神”，《佛说大荒神施与福德円満陀羅尼經》里的“三鬼”，《竈神祭文》里的“三昧耶形”使其原型的可能性很高。

はじめに

鍛冶職の主要な祭神には、金屋子神、金山彦命、稲荷神、天目一箇神、そして荒神がある⁽¹⁾。これまで荒神についての民俗学の研究では文献史料を活用する例が少なかった。本稿では荒神についてその文献史料の整理を試みるとともに、民俗伝承の実態についても概観してみる。

1. 荒神の文献史料

荒神という名称が初めて見られるのは、現在のところ『水左記』(1080)とされている⁽²⁾。

(1) 『水左記』⁽³⁾ 承暦4年(1080)

三十日辛酉 晴、夜駕車行臨大井河、令僧頼命撰州勝尾寺住僧云々、修荒神祓、件祓有神驗之由日来聞之、仍令修也、料物給絹五匹布一端、昨今物忌也、雖然殊致祈請出行、辰剋許帰、臨昏解除如例

承暦4年(1080)6月30日の夜に大井河(大堰川)で、撰州勝尾寺の僧侶である頼命に命じて、荒神祓を行なったという記事である。

(2) 『真俗雜記問答鈔』⁽⁴⁾ (鎌倉時代中期)

外典云荒神、陰陽師荒神供云是也。内典云毘那夜迦。聖天供是也。或流中付内法修荒神法云々

陰陽師が荒神供を行なっていること、仏教では毘那夜迦と聖天に相当し、荒神供と聖天供とが対比され、ある流派では修法として荒神法があるということ、が記されている⁽⁵⁾。

(3) 『山家要略記』⁽⁶⁾ (鎌倉時代後期)

○十禪師神殿奉向巽方事 第廿一

(1) 拙稿「ふいご祭りの伝承とその重層性について—祭日・祭神・供物を中心に—」『國學院雑誌』第116巻第8号、2015

(2) 高橋悠介「荒神の縁起と祭祀」『巡礼記研究』3、巡礼記研究会、2006

(3) 『水左記』臨川書店、1981

(4) 続真言宗全書刊行会校訂『真言宗全書』37、続真言宗全書刊行会、1977

(5) 「中世神話の展開—中世後期の第六天魔王譚を巡って—」『国文学 解釈と鑑賞』第63巻12号、至文堂、1998

(6) 末木文美士、水上文義、佐藤真人校注『天台神道』下、神道大系編纂会、1993

西方院僧正記云。治安二年八月十日依悪夢之告同十一月廿日奉向十禪師神殿於巽方。文。付此文有口伝。

口決曰。西方院座主僧正靈夢云。十禪師神殿内有一人高僧。而召院源似同座矣。高僧示曰。我恒時向巽方護之故、不成障礙。已上。高僧則授卷御經於院源焉。解御經紐拜見之、字賀神王福德円満陀羅尼經也。件御經有今文。夢覺了。文。

西方院座主僧正院源の夢に、十禪師神殿の中で巽の方を向いている高僧が現れる。その高僧が巽の方を向いているのは、障礙をなす存在がいるからだという。院源は高僧から経をもらうが、それは字賀神王福德円満陀羅尼經だったという。

○鹿乱神即十禪師事

御遺告云。為慈悲質直者施利益。是名十禪師。為穢惡邪欲之者成戎怪。是名鹿乱神。口決云。十禪師者即荒神案鎮之靈神也。円満陀羅尼經云。我恒時向巽方護之不成障礙。十禪師神殿向巽事、是荒神暗鎮方便也。

この記事では、十禪師神殿で巽にあつて障礙をなす存在とされていたのは荒神であるとされている。

(4) 『吾妻鏡』⁽⁷⁾ (鎌倉時代末)

文治二年二月四日壬子 營北の山の本に狐子を生む。その子御丁臺に入る。卜筮の推すところ快からず。およそ去年以来、しきりに怪異あり。かつは去ぬる比御夢想あり。貴僧一人御枕上に参り、射山の事もつとも重んじたてまつるべし。しからずんば慎みあるべきの由申すと云々。よつて若宮法眼参仕して、荒神供を修すと云々。

文治2年(1186)に若宮法眼が荒神供を行なつたと記述されている。それは怪異が起き、夢の中で僧の忠告によるものであるという。

(5) 『仏説宇賀神王福德円満陀羅尼經』(鎌倉時代以降)

自此東南角有三神王。一名飢渴神、二名貪欲神、三名障礙神。飢渴神形如餓鬼色如黒雲。貪欲神形如蝦蟇色五色。障礙神形容空体如虚空色如黄色。

天台宗の偽經である『仏説宇賀神王福德円満陀羅尼經』には、東南(巽)の方角の隅に飢渴神、貪欲神、障礙神3つの神王がいると説かれる。飢渴神は黒雲の餓鬼のような形、貪欲神は五色で蝦蟇の形、障礙神は黄色で何もない空間の形をし

(7) 貴志正造編著『全訳吾妻鏡』別巻、新人物往来社、1979

ているという。また、

我亦知能方便法。頂上冠白蛇為降伏貪欲神、右手持利劍為降伏障礙神、左手持如意宝珠為降伏飢渴神。我恒時向巽方護之。故不為障礙。

と、宇賀神王は頭の上の冠に貪欲神を降伏させるための白蛇を乗せ、右手には障礙神を降伏させるための剣を持ち、左手には飢渴神を降伏させるための如意宝珠を持っているという。そして、宇賀神王が常に巽を向いているのはこれから護り、障礙をさせないためなのだという。

十禪師神殿

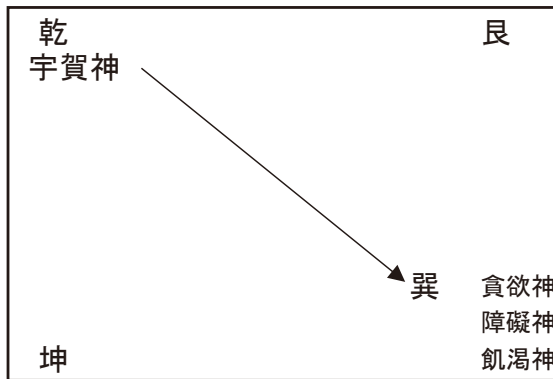


図 1

(5) 「十八契印儀軌」『阿娑縛抄』⁽⁸⁾ (13世紀頃成立)

毘那夜迦、此云象鼻、異常隨魔也、天地魔有來時不常、而是毘那夜迦、恒常隨逐一切有情、是故名常隨魔、外人所呼、荒神是也。

天台密教の儀軌等を記した「十八契印儀軌」には、毘那夜迦は象の鼻を持った異常な隨身で、天地に魔のあるときは毘那夜迦によるもので、天台密教以外の人には毘那夜迦のことを荒神と呼んでいるとの記述が見える。

(6) 『溪嵐拾葉集』⁽⁹⁾ (応長1年～貞和4年(1311-47))

凡似此尊(筆者注：宇賀神)、法花十界皆成習也。サレバ其垂迹云時、似白蛇

(8) 『日本大藏經』85、講談社、1976

(9) 『天台神道』下、神道大系編纂会、1993

為体。蛇身是三毒極成体故、三悪道撰也。似白色蛇体六法界撰尽也。……頂上有老翁形。是仏果昇出故中道仏果法門也。

光宗の著である『溪嵐拾葉集』は天台宗の伝承など多方面の知識を記した記録である。山本ひろ子によれば宇賀神が「白蛇」形を「体」とするのは、蛇身は衆生と共通する「三毒極成ノ体」であることにより、ひるがえって「三悪道」を統括することが可能となるからだという⁽¹⁰⁾。

(7)「開成伝」『元亨釈書』⁽¹¹⁾ (元亨 2年 (1322))

宝亀3年2月の夢に、八面八臂の鬼、長は丈余、百千の眷属を率ひ、各経神を取て山谷に投げ散ず。夢覚めて魔障と知る。之を慰供せんと欲して軌則に委ねず。忽ちに二鳥飛來し、二札を落とす。祭文儀軌なり。成、軌に依りて供祭す。又、事無し。世に其の軌を伝ふ。所謂、荒神供なり。

荒神供についての伝承が記されたものである。宝亀3年(772)の開成の夢に、八面八臂の鬼、長さは丈余、百千の眷属を率いて、各経神を相手に山野に投げ散らかした。目覚めて魔障と知った。忽ち二羽の鳥が飛來して、2つの札を落とした。祭文儀軌であった。その祭文儀軌によって供祭したところ、何事もなかった。世にその祭文儀軌が荒神供である、という内容である⁽¹²⁾。

(8)『荒神縁起』元弘2年(1332)

次十一面観音為利益衆生故、為毘那夜迦妻。亡師云、聖天者荒神異名眷属也。委細口伝在之。口授云、聖天者本所住第六天人也。極淫欲熾盛也。仍不似我天云、被追彼天。後住毘那夜迦山、為閻浮提人民成□身。淫貧熾盛故、鎮樂女鏡。然間十一面観音、彼極悪哀、化美麗女人、彼前通。聖天見之、大生愛染意云、□為我成婦尋。時答云、我為衆生慈悲為□。汝僂悪甚深。其全不用。時聖天云、汝仰難背。我為祓七難。仍女天発随喜心云、汝於志深。自今以後、可結縁汝。毘那夜迦者荒神異名也。

この『荒神縁起』でも毘那夜迦は荒神の異名であるとされている。高橋悠介は荒神の生成と展開を概観し、『荒神縁起』の諸本を紹介して成立の下限を示した上で、とくに荒神祭祀の伝承について検討を進め、中世の宗教文化における荒神の

(10) 山本ひろ子『異神－日本中世の秘教的世界』平凡社、1998

(11) 曾根正人校注『元亨釋書和解』神道大系編纂会、2002

(12) なお、高橋悠介によれば、この内容は醍醐寺本『諸寺縁起集』(1207年写)所収「弥勒寺本願大師善仲善算縁起文」と内容を同じにするもので、寛元元年(1243)に沙弥心空が記したという勝尾寺の流記にも同様の記述が見られるという。

意義を考察した。そこで、「荒神は、仏法が自らの外部と関わっていく際に、その境界面で、無明というマイナスの属性を逆に活かし、仏法世界を効果的に位置づけていくことにもなった」と指摘している⁽¹³⁾。

(9)『神道雑々集』⁽¹⁴⁾ (貞治5年(1336))

昔、大智の舍利弗在り。善法を修業し、道場を建立するの時、常に魔の為に、経蔵を破壊され、修法成就せず。時に舍利弗大に歎き怪みて、隠られて居伺ひ見る時、一体面八手八の長大者在り。八人の眷属を率ひて出来たりて、舍利弗に出相ふ。汝は誰そと問ふ。答へて曰く、我是三宝荒神毘那夜迦なり。またの名は那行都佐神なり。我是仏兄なり。而して以往より願を修す。人我を恭敬せざる故に、善法を破壊せしむるなり。我を敬祭せざれば、人貧窮にして、無福短命にして、病患多し。一切の災難に遭相せしむと云々。舍利弗曰く、我、未だ仏荒神と云ことを知らず。今より以後、恭敬すべし。其の名号を知らしめ給へと。爰に應へて曰く、我、那行佐神また毘那夜迦なり。即ち従類九億四万三千四百九十荒神なり。是の名を能く知り恭敬せば、法を成就せしめんと欲す。即ち舍利弗、百味供物を備へ、祭り奉る。万願成就、所念如意なり。

この、さまざまの神社の縁起を紹介した『神道雑々集』には荒神を祀るようになった由縁が書かれている。大智の舍利弗の道場の建立が成就しなかったのは面八手八の大きで8人の眷属を引き連れた三宝荒神、毘那夜迦のせいであった。舍利弗に恭敬しなければ災難が起きると言い、自身のことを那行佐神、毘那夜迦、荒神であると述べた。舍利弗は百味供物を供え祭ったところ、満願成就したという。

松岡心平は猿楽天竺起源譚のベースにこの『神道雑々集』に見られるような荒神の障碍とその供養の話置き、荒神が聖天(毘那夜迦)と習合していることをふまえた上で、猿楽が修正会で追われる鬼としての毘那夜迦を自らが演じつつ破っていた記憶が、この猿楽天竺起源譚に反映しているとしている⁽¹⁵⁾。

(10)『諸国一見聖物語』⁽¹⁶⁾ (至徳4年(1387))

(13) 高橋悠介「荒神の縁起と祭祀」『巡礼記研究』3、巡礼記研究会2006

(14)『神道雑々集』國學院大學図書館(製作)、1983

(15) 松岡心平「毘那夜迦考一翁の發生序説」『鬼と芸能』森話社、2000

(16) 亮海『諸国一見聖物語：蔓殊院藏粉河寺藏』臨川書店、1981

サテ行者曰此前兩塚コソ深々ノ秘事習塚。草木生繁何覚所也。是コソ荒神塚習也。所詮我等本有俱生自我所障云、貪瞋痴三毒依也。是依等覚深位薩埵元品无明斷セサル依妙覚果満位至サルハ、元品无明塵垢弘法性心源顕事表、此堂内陳塵垢弘此塚納也。然間アノ塚塵塚申也。サル程草不引、木切サル所也。

比叡山巡礼の行者が山内に荒神塚があるとその存在をのべ、我等本有俱生の自我の所障は貪瞋痴の三毒によるのだといい、根本中堂の内外陣の塵垢を払ってその荒神塚に納めているという。

(11) 『^{ほきないでん}簠簋内伝』卷第二⁽¹⁷⁾ (鎌倉末期～室町初期)

右今日取、貧窮飢渴障碍三神、貪欲瞋恚愚癡三毒、故万事不用。所以者何、八万四千煩惱、以三毒為根本。百億恒沙荒神、以三神為上首。故仏法專凶之。

貧窮・飢渴・障礙の三神、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒が、すべてのことを不用としてしまう。八万四千の煩惱は三毒を根本となし、百億恒沙の荒神は三神を上首としている。ゆえに仏法をもってこれを鎮めるのだという。

(12) 『仏説大荒神施与福德円満陀羅尼經』(年代不詳)

慈悲忿怒譬如車輪。闕一輪時、不得人度。荒神君惟如来權身為保仏法称仮明神。那行・都作・多婆天王・毗那耶迦・正了智等護法善神十八神王皆悉如是一身分名。不信衆生令發強信、懈怠郡類為令精進。……昔日三人大日如来・文殊師利・不動明王、亦貪・瞋・癡。今日三鬼亦復如是。意荒時三宝荒神、意寂時本有如来。

ここでは、この後の史料にも多く見られる「慈悲忿怒譬如車輪」「意荒時三宝荒神、意寂時本有如来」という文言、つまり、意が荒ぶるときは三宝荒神となり、意が鎮まるときは本有如来となるという、荒神の両面性が記されている。山本ひろ子によれば、これらの文言は『勝尾寺縁起』や慈遍著『天地神祇審鎮要記』、また後にふれる『明宿集』などにもみえているといい、右の文句を要とする荒神祭文が流通していたと指摘している⁽¹⁸⁾。

(13) 『荒神供次第』⁽¹⁹⁾ 天正20年(1410)

(17) 神道大系『陰陽道』神道大系編纂会、1987

(18) 山本ひろ子『異神－日本中世の秘教的世界』平凡社、1998

(19) 財団法人鈴木学術財団編『日本大藏経』92、講談社、1976

若欲帰依我者、身心清浄、於大河大海之側亦高山清潔之處而祭祠之、爾乃放送上方世界、七珍百味種々供物隋力弁備称我名字而祭拜焉。

荒神供は、清潔なところに祠を祭り、七珍百味の種々の供物を供えて祭ることだという。

(14)『風姿花伝』第四「神儀」⁽²⁰⁾ (15世紀初め)

彼河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕へ奉る。此藝をば子孫に傳へ、〔化人〕跡を留めぬによりて、摂津国難波の浦より、うつほ舟に乗りて、風に任せて西海に出づ。播磨の国坂越の裏に着く。浦人舟を上げて見れば、形人間に變〔れ〕り。諸人に憑き崇りて、奇瑞をなす。則、神と崇めて国豊也。大きに荒るゝと書いて、大荒大明神と名付く。今の代に、靈験あらた也。本地毗沙門天王にてまします。上宮太子、守屋〔の〕逆臣を平らげ給〔ひ〕し時も、かの河勝が神通方便の手に掛りて、守屋は失せぬと、云々。

この文章の前に、次のような記事がある。欽明天皇の御世に洪水が起きたとき一つの壺が流れ下った。三輪山の杉の鳥居の近くでこの壺を取った。中にみどり子がいた。みどり子は自身のことを秦の始皇帝の生まれ変わりだと言った。これが秦河勝である。河勝が六十六番の物まね芸をしたときに面を与えられた。上宮太子は末代のために、神楽の神の字の「示」片を取り除いて申学と名付けた。この芸を子孫に伝え、「化人」の跡を留めようと、摂津国難波の浦からうつほ舟に乗って風に任せて西海に出て、播磨国坂越の浦に着いた。すると「化人」は人間のすがたに変わっていた。そして、諸人に憑き崇って奇瑞を起こした。そのために神と崇めて国が豊かになった。これを大荒大明神と名付けた、という。前後の文脈から読み取るならば、「化人」と記されているのは、河勝が六十六番の物まね芸をしたときに与えられた「面」の意味だと考えられる。

(15)『明宿集』⁽²¹⁾ 寛正6年頃 (1465頃)

蜚人舟ヲ上ゲテ見ルニ、化シテ神トナリ給フ。当所近離ニ憑キ崇リ給シカバ、大キニ荒ル、神ト申ス。スナワチ大荒神ニテマシマス也。コレ、上ニ記ストコロノ、母ノ胎内ノ子ノ胞衣、禪ノ袖ト申セルニ符合セリ。〔胞衣ワスナワチ荒神ニテマシマセバ、コノ義合エリ。〕

この『明宿集』では、先の『風姿花伝』の語る話の部分に関連して、流れ着いた

(20) 奥田勲〔ほか〕校注・訳『連歌論集；能楽論集；俳論集』小学館、2001

(21) 表章、加藤周一校注『世阿弥；禅竹』岩波書店、1974

船の中にあつたのは化して神となつたものであつた、そして近離に憑き祟りを起したので大きに荒れる神、大荒神と呼んだと記している。

コ、ヲ似テモ、翁ニテマシマスト知ルベシ。サレバ翁ノ御事、大荒神トモ、本有ノ如来トモ、崇メタテマツルベキ也。秘文ニ云、意荒立時、三宝荒神。意若寂時、本有如来。コノ文ノ心ヲ知ルベシ。

つまり、翁のことを大荒神とも本有ノ如来とも崇めたてまつるべきである、秘文が記すところでは、意が荒立つときは三宝荒神、意が静かなときは本有の如来だという。この両面性は(12)の史料の語るところと共通するものである。そして、流れ着いたうつぼ舟の中にあつた「化して神となつたもの」というのは、(14)『風姿花伝』の記事と関連して読み取れば、神聖なる「翁面」であつたと考えられる。

(16)『三種神祇并神道秘密』

其時天照太神仰ケルハ、マケテ我ニ得。草木生、衆生作出、山野獣物・江河鱗出来時、我下居所、仏法弘、経行敬奉仰ケル。其時汝、仏荒神崇、人間(ノ)為堅牢地神仰モテナシ奉(ト)仰レハ、魔王大喜、左様候時、我一切衆生父成り、彦神成、衆生化度候。其上三千魚類云魚成、水尾里(ヲ)守護奉トソ申ケル。

(17)「日本記一 神代卷取意文」(『人文研究』27)

負テ吾ニ得サセヨ。衆生ヲ作出シ、草木ヲ生シ、山野ノ獣、江河ノ鱗ヲ生ス可シ。其時ハ、汝ヲハ荒神と崇メ、堅牢地神仰可シト宣ヘハ、魔王大喜テ、去ハ吾ハ親ト成申可シ。太神ハ子ト成給ヘ。国ヲ譲リ奉リ、一切衆生ノ父トモ母トモ成り、産神トモ成テ、衆生ヲ化度、其上三千魚類トモ也テ、水尾里ヲ守護シ、此国ヲ出テ、荒キ事ヲ成不可。

これは、荒神と第六天魔王との関係を語るもので、天照大神と国譲り譚を媒介としているものであり、伊藤聡が注目したものである⁽²²⁾。(15)の説く袍衣荒神とこの(16)、(17)の説く母胎や産神としての荒神との間には一定の脈絡が認められるであろう。そして、次のような中国地方の山間部に伝えられている神楽祭文の中にもそれに関係あると考えられるものがある。

(18)「天照大神之ドリコエ」(延宝8年(1680)写)

(22) 伊藤聡「中世神話の展開—中世後期の第六天魔王譚を巡って—」『国文学 解釈と鑑賞』第63巻12号、至文堂、1998

イカニヤ魔王、此国ヲ我ニエサセヨ。エサスルナラバ、神ニハ荒神、人間ノ為ニハウブノ神、地ニテハケンロウジ神トアカメ、四キジヤウボンノ初尾ヲマイラセン……

(19)「伍大土公神楽祭文本」(寛文8年(1667)写)

此ノ国ヲ我ニ得サセヨ。汝ヲアラ神トアガメント申久セバ、彼ヲ、ケニ喜ビテ、サラバ国ヲ譲リ奉ル。我ハ恒河ノウロウズ、山河ノケダモノマデモ我が子トナシ、ウブノ神トナツテ、水ヲノ部ヲマツリ給。二度ト此ノ国ハ出デ来タツテ荒キ事仕不申候。

伊藤聡は、『沙石集』(弘安6年(1283年)成立)巻第一「太神宮御事」、『神道集』(文和・延文(1352年-1361年)頃成立か。)巻第一「神道由来之事」にも、これらに通じる荒神との関係を語る第六天魔王譚がみられるという⁽²³⁾。

2. 竈神と荒神に関する文献史料

(20)『和名類聚抄』⁽²⁴⁾ 承平年間(931-938)

春三月在竈、夏三月在門、秋三月在井、冬三月在庭

ここでは、土公は、春3月は竈に、夏3月は門に、秋3月は井戸に、冬3月は庭にいるとしている。

(21)「文明九年五龍王祭文」⁽²⁵⁾ 文明9年(1477)

御名ヲハ盤古王ト申ス、五人ノ王子坐カ所務ヲ給テ、(中略) 五郎ノ王子ニハ十八日ツ、ヲ取合ハ是モ七十二日ニ相当候、四土用ノ主ト成給へ、庶務善哉也善哉也、悦給ヤ。

これは、盤古王と五人の王子の社務分けの内容で、大土公神祭文に先行する祭文である。

(22)「修祓祭文」⁽²⁶⁾ 明応4年(1495)

(前略)

(23) 伊藤聡「中世神話の展開—中世後期の第六天魔王譚を巡って—」『国文学 解釈と鑑賞』第63巻12号、至文堂、1998。伊藤は中国地方の神楽が「神霊 宝剣 内侍処」『日本記一神代巻取意文』と系統を同じくするものとしている

(24) 『和名類聚抄』名古屋市博物館、1992

(25) 岩田勝『神楽源流考』名著出版、1983

(26) 岩田勝『中国地方神楽祭文集』三弥井書店、1990

謹請 水神之 ミサキ
 謹請 大荒神之 ミサキ
 謹請 小荒神ノ ミサキ
 謹請 天神ノ ミサキ
 謹請 地神ノ ミサキ
 謹請 土公神ノ ミサキ

(中略)

カクノコトク日ニシタカツテアルミサキタチノカスハ、惣テ八万千六百五十四神等、今ノハラニヨツテ正覚ヲ成就給ヘテ各々本里本郷エミカエリ給フヘシ、□々如津令

ここでは、「大荒神」「小荒神」「地神」「土公神」の記述が見られることを指摘している。

(23)「竈神祭文」⁽²⁷⁾ 天文15年(1546)

謹請東方ニ青帝龍王来入御座、
 謹請南方ニ赤帝龍王来入御座、
 謹請西方ニ白帝龍王来入御座、
 謹請北方ニ黒帝龍王来入御座、
 謹請中央ニ黄帝龍王来入御座、

(中略)

夫竈ノ神ト申奉ルハ、五知ノ如来ノ三マヤキヤウ也、サレハ一ツニハ定光佛、二ニハネントウ仏、三ツニハシヤカムニ仏、四〔ニ〕ハ薬師仏、五ニハ阿弥陀仏、一躰同心大日如来ト申奉也、マタホサツトインハ、一ツニハ文殊師利ホサツ、二ツニハヤク王□、三ツニハコクウソウ□、四ニハクワンセランホサツ、五ツニハ地藏ホサツ、六ニハミロクホサツ、七ツニハリウシユホサツ、八ニハセイシホサツト申奉、若干ノホサツノ中ヨリカマノ神ト成玉フ、其時マ王五道神ト現シ玉フ也、サレハミラワケテ、東方ニ八王子、南方ニ八王子、西方ニ八王子、北方〔ニ〕八王子、中央ニ八王子、シカレハ八万四千六百五十余神王ノ本所也、一切ノソクナンヲ八咫八神トモニ此竈神ノヘンケナリ、信セン人ハ現世安穩ニ守護シ玉フト申ス、ヨクヨク竈神ヲシ

(27) 岩田勝『中国地方神楽祭文集』三弥井書店、1990

ンスヘシ、一切ノ仏ホサツノ御前ニテハ三宝荒神ト成玉フ、サレハ春三月ハ三十六所ノ竈ノ神、ナツ三月ハ二十八宿ノカマノ神、秋三月ハ四十九所ノカマノカミ、(脱漏あり)ナリ、七ナンフクメツ七福即生、寿命長遠息災延命、諸人快樂子孫ハンシヤウ、家内安穩ニ守処、□々如津令、敬白、

天文拾五天丙午十二月吉日

ノトロ式部

ここでは、竈神を信じることにより、一切の仏菩薩の前では竈神が三宝荒神となるとのべ、春夏秋冬の四季を通して三宝荒神が竈神となって息災延命、子孫繁盛、家内安穩などの利福を与えてくれるとのべている。三宝荒神についてみると、(9)が早い例であるが、その由来からいえば、(5)(11)の「三神」、(12)の「三鬼」、(23)の「三マヤキヤウ(三昧耶形)」からきている可能性がある。岩田勝はこの祭文の段階では、竈神が三宝荒神と結びつき、土公がどこにも現れなくなったことを指摘している。後述する今日の民俗伝承に見られる荒神の竈神としての性質はこの頃から定着していったものと考えられる。

(24)『日葡辞書』⁽²⁸⁾(慶長8年～慶長9年(1603-1604))

Quojin。アラキカミ〈訳〉台所のかまど、なべの加護を願う神

17世紀初めの『日葡辞書』では、荒神はかまど神であるという記述がみえる。

(25)『人倫訓蒙図彙』⁽²⁹⁾元禄3年(1690)

世に釜戸を荒神と号す。家内安全福貴の守護神、本地普賢菩薩なり。信心ありて28日を祭れば七難即滅滅なり

17世紀末の『人倫訓蒙図彙』では、釜戸を荒神と名付けるという記述がみられる。家内安全福貴の守護神で、本地は普賢菩薩だと説明されている。信心して28日に祭れば七難が滅滅するという。

3. 荒神に関する民俗資料

荒神の民俗伝承について情報を収集整理してみたのが、表1である⁽³⁰⁾。それらの情報と、先の文献史料の整理と対比させてみると、以下の点が指摘できる。

①38島根県、60大分県、64宮崎県の、土を集めて祀っている荒神塚と考えられ

(28) 土井忠生、森田武、長南実『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980

(29) 『人倫訓蒙図彙』大空社、1998

(30) 『日本の民俗』(青森県から鹿児島県)第一法規出版、1972-1975から収集

【表1】 民俗伝承のなかの荒神（『民間信仰』シリーズ（第一法規出版）から）

	都道府県	内容	名称	土地神	かまどの神・火の神	作物神
1	福島県	荒神さまは屋敷荒神などともいって板札をたてておく家もあり、千枚になると火事にならないと信じている	屋敷荒神		○	
2	茨城県	かまど神…「おかまさま」とか「荒神さま」と呼び、火をつかさどる神、農業を守る神として信仰している	荒神		○	○
3	茨城県	かまど神は、屋内だけでなく神社としても祀られている。水戸市下市のかまど神社（三宝荒神）、那珂市湊市蔵のかまど神社、同市部田野の釜神社、久慈郡金砂郷村上宮河内のかまど神社など	三宝荒神		○	
4	栃木県	九月二十九日のかまはじめの日、おかまさまとともに三宝荒神の幣を迎えて神棚に祀る…おかまさまの幣束を荒神さまと呼んでいる	荒神		○	
5	栃木県	真岡市京泉には荒神塚があり、古墳の上に三宝荒神を祀っている	荒神、三宝荒神	?		
6	埼玉県	かまどの神さまを県下では「オカマサマ」という。また荒神さまと区別せずにオカマコウジンと呼んで同一の神と理解しているようである	オカマコウジン		○	
7	埼玉県	川越付近では荒神は産神だという	荒神			
8	神奈川県	荒神はカマドに祀られている	荒神		○	
9	神奈川県	田植え地帯は田植え後、苗を三把荒神に供えるといっで…	荒神			○
10	山梨県	三宝荒神をつつかぎさまを指して呼ぶこともある	三宝荒神		○	
11	山梨県	荒神祓い	荒神			
12	山梨県	物が紛失した時、つつかぎ様をこよりで結んで荒神を拝むと発見される	荒神		○	
13	山梨県	小正月のつくりものの中にも、三宝荒神と半紙に書き	三宝荒神			
14	山梨県	塩山氏高橋の三宝荒神は富士講の荒神	三宝荒神、荒神			
15	山梨県	都留市東桂町沖の荒神祭…一年中火災のないように	荒神		○	
16	長野県	三宝荒神が火をまもる神、したがってイロリの神、カマドの神として祀られている。…荒神柱…イロリ・カマドのあたりを掃く箒は、荒神箒…	三宝荒神、荒神		○	
17	長野県	炭焼きの窯、焼き物の窯などでも、その窯の神として、三宝荒神を祀る習わし	三宝荒神		○	
18	長野県	年の始めに欄直を招いて、屋敷神と荒神様を拝んでもらい、その年の平安を祈る	荒神			
19	静岡県	荒神さん…かまど神	荒神		○	
20	滋賀県	荒神さんは火の神であり、かまどの神	荒神		○	
21	滋賀県	彦根市…荒神神社…主神の火産靈神は火の神	荒神、火産靈神		○	
22	滋賀県	「荒神っ子」…平凡な人の子どもに偉い人が出たこと	荒神			
23	滋賀県	勝負師や相場師がとんとん拍子に当たることを荒神さんが乗りうつった	荒神			
24	京都府	大釜さまに供えられるオカガミ一重ねを荒神さんのオカガミ	荒神		○	
25	京都府	下桂での三宝荒神に対する正月の供物…オオガマの蓋の上にお供え	三宝荒神		○	
26	大阪府	カマド（くど）の近くの柱に棚を作って三宝荒神を祀る	三宝荒神		○	
27	大阪府	荒神さんに田植の時、稲（苗）三把をのせて祀る	荒神			○
28	大阪府	仔牛が産まれたとき、荒神にお参り	荒神			

29	大阪府	屋敷神と兼ねるものもある	荒神			
30	鳥根県	醜の乾湿具合で来年の豊凶を占う山根の霊は作神であり、能義・八束・飯石の各郡にみられる。オゴク(小豆飯)を牛馬に食わせて牛馬を森に連れて行き籠ったりする牛荒神の場合もある	牛荒神			
31	鳥根県	庄原における旅行の神	荒神			
32	鳥根県	日原における防火や悪病の神	荒神		○	
33	鳥根県	山根における足痛・梅毒の神としての流行神の性格	荒神			
34	鳥根県	海潮における山の繁昌や安産の信仰	荒神			
35	鳥根県	浜田ではカマドをクドといい、荒神さんをベツツイさんともいう…隠岐でもカマ荒神といって昔は竈の脇に祀ってあったともいう	荒神、ベツツイ、カマ荒神		○	
36	鳥根県	浜田の荒神さんは毎月一日と十五日に酒と榊を供えるほか、正月や節分にも飾りを上げ、「ダイコウジン様」といって祈るといふ	荒神			
37	鳥根県	平田市の荒神は火除けの荒神である	荒神		○	
38	鳥根県	荒神を屋敷内にまつる部落は、因伯を問わずみられるが、赤碕町飽津では、古くは敷であった塚の上にまつられていたともいい、岩美町岩常では樹木の茂った林の中にあり、最も力のある荒神などといわれるところから、どこでも部落神としての性格が強い	荒神			
39	岡山県	新見市千屋字花見という小部落には五つの荒神がまつられている。モトヤマ荒神、コミ荒神、野原荒神、カナヤ荒神、三宝荒神である。モトヤマ荒神は部落荒神である…コミ荒神は花見部落の中の下が市組の荒神で神田もある…野原荒神は花見部落の野原苗の荒神である…カナヤ荒神は金屋子神をまつるもので、もとタタラをしていた子孫たちがまつっているのである。三宝荒神は牛の安産、安全、繁栄をたのむ神となっている	モトヤマ荒神、コミ荒神、野原荒神、カナヤ荒神、三宝荒神			
40	岡山県	備中地方での荒神はヘソノオの荒神といって氏神となっていて、子どもが生まれ忌があけて三十三日にミヤ参りをさせたり、他郷に出稼ぎに出たり、嫁いでいても荒神の祭には帰ってきて祭りに参加している	ヘソノオの荒神			
41	山口県	荒神…たいていは作り神として崇敬されている…九、十月ごろ部落が組に分かれて当屋に集り、神官・法印を招いて神楽―荒神祓いをあげ…	荒神			○
42	山口県	竈神としては竈場の近くに三宝荒神を祀る。火災から家を守る火の神である。農家では作り神でもあり、一年を通じて荒神穂が供えられる…荒々しい神なので、穢れがあるとつつしみさける	三宝荒神		○	○
43	山口県	屋外神…祭神としては八幡・若宮・荒神・稲荷・稲荷・貴船・神明など数多く…	荒神			○
44	香川県	カマド神…佐柳島ではオドックウ(土公神)様と呼ばれており、高松市川部町の前屋敷部落では「オクドウ様」といっている…神々の名は、興津火産靈土神、三宝荒神、五行土荒神	オドックウ様、土公神、オクドウ様、興津火産靈土神、三宝荒神、五行土公神		○	
45	愛媛県	戸島の本浦では、村の鎮守の境内に祀られている…無病息災を祈り祝う…この祭事を「お荒神申し」…この荒神様は荒々しく、人や家に祟る	荒神			
46	愛媛県	南宇和郡城辺町や一本松町の地域になると、タタリ神的性格は薄れてきて、農耕の無事、作物の豊穰を祈願する作神的性格に変っている	荒神			○

47	愛媛県	南宇和郡城辺町緑…お荒神祭りをする…荒神祓…	荒神		
48	福岡県	三宝荒神と呼ばれるこの神は、イエの守護神とも、その中心である竈の神とも意識されている…オコシ様…山伏の村回りの折には必ず荒神竈前の祈祷…荒神経	三宝荒神、オコシ様	○	
49	長崎県	カマド神…そしてときには荒神として敬われ、恐れられている	荒神	○	
50	長崎県	カマド祭り…お湯のたぎるカマドの荒神さまの前に神官と対座する	荒神	○	
51	熊本県	天草郡本渡市志柿では、田植の日に苗を二東カマドの上に飾って荒神さんに供える	荒神		○
52	熊本県	カマド荒神はケガレを嫌うので、平素カマドの付近をきれいにしておかねばならぬ	カマド荒神	○	
53	熊本県	カマド荒神と同じように井戸荒神も祀る	イド荒神	○	
54	大分県	土地の人々は地荒神は素戔鳴尊であり、悪魔疾病払う神として絶大な信仰をささげている…その代表的なものが竹田市城原八幡のへボ荒神である…子どものへボとは、みずぼうそうのことで、へボ荒神はそれを治す神…この荒神のおおもとが竹田市宮砥の宮砥荒神である	へボ荒神		
55	大分市	竹田市飛田川宇天神の足手荒神…このお石をなでて手足の悪いところをなでると手足の病が癒る…別府市南立石の手足荒神…病気が癒る	足手荒神、手足荒神		
56	大分市	乙女の大荒神社…部落氏神としての大荒神社…田を守ってくださる作神…田植のあと苗を二東残し、一東は大荒神に供え、あとの一東は自分の家の荒神棚に供える	大荒神社		○
57	大分県	内荒神は竈に祀るカマド荒神のことで…盲僧のいる地域では、いまも四季土用のうち春、秋二季盲僧による荒神祓を厳重に行なっているところもある	カマド荒神	○	
58	大分県	荒神様は怪我災難を防ぐといい、子どもたちが遠出や外出する場合は…	荒神		
59	大分県	外荒神は普通屋敷荒神といわれる通り屋敷神的機能をもっている…盲僧あたりは、屋敷荒神、土荒神、屋敷金神、土金神とごっちゃな呼びかたをしており…	屋敷荒神、土荒神、屋敷金神、土金神		
60	大分県	別府地方や大分郡地方などの山間部では、外荒神のことを上げ荒神といい、かまどをくずした時、その土を捨てて場所を数軒で共同に持っており…	上げ荒神	○	○
61	大分県	大野、直入地方のような山間部になると、外荒神は藪荒神と呼ばれるのが普通で、どちらかといえば祟り神とみられており…	藪荒神		
62	宮崎県	屋敷荒神…屋敷の中のある場所、また近いところにただ石積みそのままにしたもの	屋敷荒神	○	
63	宮崎県	地主荒神…神とか南天などを植えているが、それを折ると病気になるなど、よく祟るものと信じられている	地主荒神	○	
64	宮崎県	同族地主荒神(外神さま)…竈の崩れたところや塵捨て場などに祀って、祟りが激しく御神体のあるところに踏み込むと、体に変調があらわれる	外神さま	○	○
65	宮崎県	荒神さんの木…西郷村和田地方では、荒神さんと呼ばれている大木があつて…	荒神		
66	宮崎県	荒神森…森の中に荒神を祀る…荒神さまはよくサスラウ神さん…荒神さまは山伏だとの伝承がある	荒神		
67	宮崎県	かまど神…荒神さんともいい…火を焚いたあとの焼けた土を取り除かないと、荒神の祟りがある	荒神	○	

る事例は、史料(10)『諸国一見聖物語』(至徳4年(1387))の「元品无明塵垢弘法性心源頭事表、此堂内陳塵垢弘此塚納也」という記事に対応する。

- ② 11山梨県、47愛媛県の、荒神祓をしている事例は、史料(1)『水左記』承暦4年(1080)の「修荒神祓、件祓有神驗之由日来聞之」という記事に対応する。
- ③ 57大分県で、かまど神としての荒神を四季土用と春秋に荒神祓しているのは、史料(20)『和名類聚抄』承平年間(931-938)の「春三月在竈」という記事や(23)「竈神祭文」天文15年(1546)の「サレハ春三月ハ三十六所ノ竈ノ神、ナツ三月ハ二十八宿ノカマノ神、秋三月ハ四十九所ノカマノカミ、(脱漏あり)ナリ」という記事に対応する。
- ④ 2茨城、3茨城、4栃木、6埼玉、8神奈川、10山梨、16長野県、17長野県、19静岡県、20滋賀県、21滋賀県、24京都府、25京都府、26大阪府、35島根県、37島根県、42山口県、44香川県、48福岡県、49長崎県、50長崎県、51熊本県、52熊本県、53熊本県、57大分県、で、かまど神を荒神であるとしているのは、(23)「竈神祭文」天文15年(1546)の「ヨクヨク竈神ヲシンスヘシ、一切ノ仏ホサツノ御前ニテハ三宝荒神ト成玉フ」という記事に対応している。

まとめ

文献史料の情報と民俗資料の情報とその両者を整理し対比させると、荒神の信仰の歴史的な展開と、それがどのように現在の民俗伝承へとつながってきているのかが考察できる。民俗伝承の地域的な分布の意味などを考えていくためには、まだまだ資料情報の収集が必要であるが、この文献と民俗の両者の情報収集と対比という方法の有効性を検証していく意味はあると考える。文献から辿ることができた点としては、たとえば、荒神と三宝荒神とが祭られているのが民俗の実態であるが、早い例は平安時代11世紀の(1)の荒神祓のかたちであった。その次が鎌倉期12世紀の(2)の荒神供というかたちであった。13世紀から14世紀の中世の多様な神仏信仰が混沌としていた状態のもとでは、天台密教の十禅師や宇賀神に対比されるかたちの荒神の信仰も生まれていた。それに陰陽五行の信仰も混淆して、土公神との習合、竈神としての荒神や三宝荒神のかたちが展開してきた。その三宝荒神の由来については、前述のように、(9)が早い例であるが、その由来からいえば、(5)(11)の「三神」、(12)の「三鬼」、(23)の「三マヤキャ

ウ(三昧耶形)」からきている可能性がある。

参考文献

- [1] 表章, 加藤周一校注『世阿弥; 禅竹』岩波書店、1974
- [2] 財団法人鈴木学術財団編『日本大蔵経』92、講談社、1976
- [3] 『日本大蔵経』85、講談社、1976
- [4] 続真言宗全書刊行会校訂『真言宗全書』37、続真言宗全書刊行会、1977
- [5] 貴志正造編著『全訳吾妻鏡』別巻、新人物往来社、1979
- [6] 土井忠生、森田武、長南実『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980
- [7] 『水左記』臨川書店、1981
- [8] 亮海『諸国一見聖物語: 蔓殊院藏粉河寺藏』臨川書店、1981
- [9] 岩田勝『神楽源流考』名著出版、1983
- [10] 『神道雑々集』國學院大學図書館(製作)、1983
- [11] 神道大系『陰陽道』神道大系編纂会、1987
- [12] 岩田勝『中国地方神楽祭文集』三弥井書店、1990
- [13] 『和名類聚抄』名古屋市博物館、1992
- [14] 末木文美士, 水上文義, 佐藤真人校注『天台神道』下、神道大系編纂会、1993
- [15] 『人倫訓蒙図彙』大空社、1998
- [16] 山本ひろ子『異神—日本中世の秘教的世界』平凡社、1998
- [17] 伊藤聡「中世神話の展開—中世後期の第六天魔王譚を巡って—」『国文学 解釈と鑑賞』第63巻12号、至文堂、1998
- [18] 松岡心平「毘那夜迦考—翁の発生序説」『鬼と芸能』森話社、2000
- [19] 奥田勲[ほか]校注・訳『連歌論集; 能楽論集; 俳論集』小学館、2001
- [20] 曾根正人校注『元亨釋書和解』神道大系編纂会、2002
- [21] 高橋悠介「荒神の縁起と祭祀」『巡礼記研究』3、巡礼記研究会、2006